

『新青森市史 通史編第四巻 現代』

高瀬 雅弘

本書は、『新青森市史』通史編の最終巻であり、平成八年より開始された青森市史編さん事業の完結編となるものである。自治体史でありながら、明るい色づかいのカバー（青森市小学校社会科研究会編「私たちの青森市」の地図が用いられている）や豊富な写真・図版資料など、手に取って読まれることを意識した工夫が随所にみられる。「市民の歴史」を標榜する本書が多くの人に受け容れられたことは、青森市内の書店の週間売り上げベストテンにランクインしたことからも窺える。なお本書が対象とする「現代」とは、主として昭和二〇年の敗戦後から平成一七年の浪岡町との合併までの時期であり、第五章ではそれ以後の時期までも含めた叙述がなされている。

本書は次のような五つの章から構成されている。

第一章 廃墟からの出発

第一節 廃墟から復興へ／第二節 復活した青森市／第三節 食糧

増産と農業

第二章 変わりゆく県都

第一節 復興から発展への胎動／第二節 アーケード時代の青森市／第三節 海と山に親しむ／第四節 青森市の山林資源／第五節 水産資源の利活用と環境整備／第六節 新しい教育と教育制度／第

七節 戦後の社会教育

第三章 流通都市の変容

第一節 革新市政と保守市政／第二節 青森港の大埠頭化／第三節 東北本線の複線電化／第四節 戦後青森市の都市計画／第五節

青森市を襲った数々の災害／第六節 地域に育まれた文化活動／第

七節 青森市の戦後文学の隆盛

第四章 明日へと続く豊かなまちへ

第一節 “うれしいまち”を目指して／第二節 青函連絡船の廃止／第三節 青森市の企業と企業人／第四節 中核都市・青森を目指して

第五章 統計からみる現代の経済

第一節 人口からみた歩み／第二節 就業人口からみた歩み／第三

節 商業関係統計からみた歩み／第四節 産業統計からみた歩み／

第五節 中心市街地の盛衰／第六節 データからみた市民生活／第

七節 経済の歩みのまとめ

本書は通史としての時系列の流れをきちんと押さえつつも、その構成はかなりユニークである。それは次の二点にまとめられよう。

ひとつは、時期区分のユニークさである。日本という国家レベルの歴史過程を示すものとしての「高度経済成長から安定成長へ」「石油ショック」「昭和から平成へ」「バブル経済と平成不況」といったキーワードは、登場こそするが、これらはどちらかといえば後景に退いている。各章・節の表題は、マクロな時代状況の変化に基礎づけられつつも、時代

ごとの青森市の性格、さらには都市青森にとっての目標ないし課題を表現している。本書は、NHKの番組名になぞらえるなら、「青森市（民）は何をめざしてきたのか」についての歴史でもある。

もうひとつは、各章に割り当てられた時代区分のなかに政治史・経済史・社会史・生活史といった要素がそれぞれ分配されていることである。異なる分析視角が各章にバランスよく配置されていることで、時代ごとの状況を、複数の視点を関連づけながら立体的に読み解く楽しさを読者に与えてくれている。

以下では各章の内容を簡単に紹介しつつ、評者がその歴史叙述から得た青森市史の印象について述べてみたい。

第一章「廃墟からの出発」は、青森空襲による都市機能と生活基盤の喪失による混乱からの秩序の回復と生活の再建が主題となっている。ここの目標は、「生きる」ということに集約される。マクロな動向に翻弄されつつも再建を図ろうとする行財政、混沌とした状況のなかでたたかいたくましく生きようとする街の人々、そして食べる〓生きるための模索と奮闘が描かれている。確かに戦争による喪失と欠乏の経験は、一見すると「青森には何もなくなつた」かの印象を抱かせる。しかし本章を読んでいると、青森市の戦後は決して「欠如の歴史」だけではないことに気づかされる。この時代の描写にあたっては、文献資料の焼失というハンディキャップもあったことと思うが、それをカバーしているのが、ひとつには『東奥日報』をはじめとした新聞の存在であり、もうひとつは『青森空襲の記録』のような記録資料である。ここから「メディア都市」としての青森市の姿、また喪失の記憶を記録しようとする「市

民力」を感じ取ることができる。これらは「欠如」から生じた「獲得」であるともいえるのではないか。併せて戦後開拓や農業の展開は、都市〓中心部に目が行きがちな読者の視野を郊外にまで広げ、青森市の空間的な広がりを感じさせるものとなっている。それは青森県の「縮図」としての青森市の姿を浮かび上がらせている。

第二章「変わりゆく県都」は、戦災からの復興という課題が克服され、代わって発展がキーワードとなる時代状況を描いている。この章にあつての目標は、様々な機会（チャンス）を「広げる」ことである。マクロレベルの課題が政治から経済へとシフトしていくなかで、消費の機会を拡大する、レジャーに触れる、資源を活用する、教育機会を広く提供する、といった様々なライフチャンスの実現が図られようとする時代である。なかでも印象的なのが、第二節「アーケード時代の青森市」である。ひとつの時代区分を表すものとして「アーケード」が用いられたことは、新鮮な印象を読者に与えるばかりでなく、青森市民にとってその存在がいかに象徴的なものであるのかを教えてくれる。写真とともに描かれる店舗の数々は、それぞれの時代に街を歩いた人々の懐かしい記憶を喚起することだろう。また、こうした消費社会化の進展や余暇〓レジャーの機会の拡大は、個人よりもむしろ家族のあり方にとって重要であつたといえる。経済の発展が家族の生活様式や価値観を変容させ、新たな家族のなかで育まれた新たな意識が、整備拡充されていく学校教育に反映され、新たな人生の機会が希求されていったことを連想していくと、この時代が様々な可能性を内包していたことがよくわかる。

第三章「流通都市の変容」では、高度経済成長という時代のなかで、

革新と保守をめぐる市政の動向、港湾や鉄道といった交通環境の整備、郊外化と都市計画、災害と対応、大衆文化や市民による文化活動、戦後文学といったテーマが取り上げられている。扱われる対象が多岐にわたっているため、その特徴を捉えるのは難しいが、この段階の目標は、「整える」ことおよび「関わる」ことになる。本章の叙述からは、青森市がその外側の社会との関わりを深めていく過程がよくわかる。政治に目を向けるなら、近年の戦後史研究において注目が集まる一九六八（昭和四三）年という年が、いかなる転換点であり、どのような意味をもっていたのかを、青森市を中心として、日本、世界という形で同心円的な広がりをもって捉えることができる。青森港の大埠頭化や東北本線の複線電化といった事象もまた、青森市（県）と他の地域とをつなぐ、すなわち関係性の強化と大きく関わっている。とりわけ青森市において鉄道がいかに重要なものであるかは、本章の充実した記述からよく伝わってくる。他方、内在的な課題としての郊外化や災害への対応は、都市計画と相まって、この時期の青森市をひとつの「完成形」とするものである。また、かつて多く存在した映画館は、映画を通しての文化の流入の象徴であり、一方版画や文学は青森市から全国へと発信されたものであり、こうした文化もまた「関わる」ことにつながっている。

第四章「明日へと続く豊かなまちへ」では、ポスト高度成長の時代における、青森市のまちづくりを表すキーワードとして全国的に知名度を高めた「コンパクトシティ」構想、三内丸山遺跡・小牧野遺跡の発見、東北新幹線の盛岡以北の工事着工、青函連絡船の廃止と青函トンネルの開通、といった歴史的出来事、企業や中心商店街の盛衰、そして浪岡町

との合併と今後の都市づくりへの展望、といったテーマについての叙述がなされている。この段階での目標とは、バブル経済の崩壊を経験しての低成長下において「持続する」、あるいは昨年（平成二六年）に大きな注目を集めた「地方消滅」論に対して「生き残る」ことである。こうした課題に対して掲げられたスローガンが「うれしいまち」である。希望あるスローガンの一方で、本章で扱われている対象の多くについては、苦難や葛藤の位相が色濃くにじみ出ている。青函トンネルをはじめとした交通体系の再編や企業活動の活発化、百貨店の展開は、それぞれ当初は希望を示すものであったが、現在は翳りをみせている。都市としての青森市の立ち位置が問われるなかで、目指すべき方向性として示されているのは「持続可能」な成熟都市」というあり方である。多くの地方都市が直面している課題を要領よくまとめた叙述に感心しつつも、評者は本章にいささか物足りなさを感じた。というのは、課題解決の方途やあるべき都市の形を模索するうえで今後重要だと考えられる女性の視点や様々な市民の活動がここではほとんど取り上げられていないからである。管見の限り青森市にはこれらの十分な蓄積があるだけに、より市民に寄り添う形の叙述があればよかったと思う。

第五章「統計からみる現代の経済」は、人口動態、労働市場（就業人口）、商業（販売額）、生産（産業構造）と流通（主に輸出入）、中心市街地の状況（商店数、販売額、通行量）、市民生活（所得、住居、自動車、上下水道、住みやすさと定住意識）について、統計データからその動向をたどっている。青森市はもちろんのこと、弘前市・八戸市のデータを並列させることで、三市の比較に基づいた県都青森市の位置づけを

行っている。データから読み取れる諸傾向がわかりやすく解説されているだけでなく、統計資料そのものに内在する問題点（たとえば人口統計を分析する際の補正という課題など）についても丁寧な説明がなされており、後学の人々に向けて親切なものとなっている。ここで分析されている各々の統計は、単なる数字の羅列ではない。それぞれは現在、さらには今後の青森市にとっての課題（少子高齢化、就労、地方経済の安定、中心市街地の活性化、定住人口の確保）を考えるうえでの貴重な資料となる。青森市が経験してきた課題を歴史のなかに閉塞させるのではなく、将来に向けて開き、考察の材料を提供している点において、本章は他の自治体史と比した際の本書の価値を大きく高めている。

以上のように、本書は自治体史としての基本を押さえつつも、随所に新たなスタイルを提案している。そして生活のなかでの苦難や歓喜の記憶を呼び起こす内容は、世代と世代とをつなぐという意義ももっている。こうした点において、「市民の歴史」を標榜する本書の企画意図は十分に果たされていると評者は考える。弘前市を引き合いに出した対比において、「県都としての文化の蓄積がないわけではない」（六四五頁。傍点評者）と謙遜する青森市だが、文化というものを高尚な、薰り高いものという狭い意味ではなく、「人々の営み」の総体として捉えるならば、「ないわけではな」く、むしろ「豊かにある」ことを評者は本書から実感することができた。

なお、本来であれば本書のようなしつかりとした歴史書は、歴史家によって評価されるべきである。ただ県内の近現代史研究者の方々はほとんどが本書ないし『青森県史 近現代編』に関わられているという理由

から、社会学を専門とする評者が役者不足を承知のうえで引き受けすることとなった。読者諸賢には、このような事情を鑑み、評者の関心に特化した書評と紹介になったことをご諒解いただければと思う。それでも、本書が様々な面で評者の「社会学的想像力」を刺激したことは、その魅力が歴史家にとどまらない広がりをもっていることの証左であると考えている。

最後に、多年にわたる市史編さん事業に尽力され、多大な努力と工夫とを注がれた関係者の皆様に、心から敬意を表したい。

（A5版、七六四頁、二〇一四年三月刊、青森市史編集委員会、

本体価格五一〇〇円＋税）

（たかせ・まさひろ 弘前大学教育学部准教授）